

巻頭言

西山雄二

雑誌の創刊号は往々にして力の入った内容になりがちだが、本号も当初の予想をはるかに上回った充実した仕上がりとなった。「雑誌をつくりたいのですが……」と大学院生らから言われたのが2021年9月半ばだったが、そこから破竹の勢いで準備が進み、企画が膨れ上がった。原稿や翻訳を引き受けて、短期間で完成させてくれたみなさんに心より感謝する次第である。

二つの特集はフランスの哲学者カトリーヌ・マラブーに関するものである。2021年9月10日、「カトリーヌ・マラブーの哲学」がオンラインにて実施され、マラブー本人を交えて議論がおこなわれた（主催：脱構築研究会、共催：日仏哲学会、後援：東京大学「共生のための国際哲学研究センター」(UTCP)、助成：東京都立大学）。

第一特集ではカトリーヌ・マラブー『抹消された快樂——クリトリスと思考』（西山雄二・横田祐美子訳、法政大学出版局、2021年）をめぐる郷原佳以氏、中村彩氏による合評会の記録が収められている。また、古怒田望人、浜崎史菜、杉浦鈴、丸山美佳の各氏には書評の形で文章を寄せていただいた。『抹消された快樂』に対する批判的な注釈も記されていて、訳者として多くのことを勉強させていただいた。クリトリスという身体器官を特権視することの危険性、トランス男性の実存が不可視化されている問題など、本書の限界が的確に示され、さらなる議論の広がりが見えられた。

第二特集の「共同討論 カトリーヌ・マラブーの可塑性の哲学」では、マラブー哲学全体について7名との討議が記録されている。哲学、精神分析、脳科学、ジェンダーなど議論は多岐にわたっており、マラブー思想の多面性を理解することができる。それぞれのコメントと質問に対して、マラブー氏は真摯に考え、ときに戸惑いつつも、丁寧に回答を寄せてくれた。

第三特集「フランスにおけるインターセクショナルリティ批判」では、現在のフランスにおける保守反動的な思潮に関する文章を収録している。脱構築、インターセクション研究、ポストコロニアル研究、ジェンダー研究などがひとまとめにされて、フランスの共和主義を揺るがす知的脅威とみなされる。イスラーム主義と粗雑に結びつけられ、フランスの普遍主義に対する深刻な危機として解釈される。嘆かわしい状況にも映るこうしたフランスの知的動向について、ボルドー在住のファオル入江容子氏に適切な文章を書いていただき、歴史的・社会的文脈を十全に解き明かしてもらった。

翻訳については、若き大学院生らに自分の研究テーマに応じて論文をいくつか選出してもらった。西山から著者に連絡をして、許可が得られた論考を翻訳し掲載している。カトリーヌ・パンゲ、デヴィッド・L・クラーク、ブリジット・ウェルトマン＝アーロンの各氏には依頼メールに対して即答で翻訳の快諾をしていただいた。鶴飼哲氏にはパンゲ氏への連絡の労をとっていただいた。Johns Hopkins University Pressには迅速に翻訳を許可をしていただいた。翻訳テキストにとって解説は重要で、読者の理解の助けになるし、そもそも訳者自身の勉強になる。今回はいずれも

力のこもった訳者解説を寄稿していただいた。関係者各位には心より感謝申し上げます。

八木悠允氏には長大なウエルベック論を書いていただいた。長年ウエルベック研究を積み重ねてきた八木氏だが、数々の先行研究を参照し、フランス語におけるポワン・ヴィルギユルの歴史を踏まえた上で濃密な議論を展開している。

志村響氏は大学在学中の 2015 年に東京都国分寺市で語学塾こもれびを開設し、英語とフランス語などの学びの場を提供してきた。こもれびは 2021 年末に閉塾したが、この機会に、5 年以上にわたって彼がこの独特の場で教えてきた経験と学識が詰まった文章を書いていただいた。

表紙と目次のデザインに関しては、北川光恵氏に協力していただき、納得のいくデザインに仕上げる事ができた。

以上が創刊号の内容である。半年間での製作にもかかわらず、予想を超えて重厚な号に仕上がったことを本当に嬉しく思っている。関係者のみなさんにはあらためて心からお礼申し上げます次第である。

西山雄二